



展示会「アートな介護」にはデザイン性豊かなさまざまなツールが出品される

広島県内のデザイナーら「現場に潤い・明るさ」届けたい

「介護は大切な仕事なのに、暗い、きつい、汚いって。そのイメージがあるでしょう。アートによって少し変えられないかかって考えたいです」。展示会を企画するグラフィックデザイナーの川原信子さん(68)は広島市南区に居る。2011年から福島のショッピングバッグのデザインを担当している縁で、ここ数年福島のギャラリーで講座を開いてきた。今年には仲間とユニット「SANJYU・MARU・PROJECT」をつ

11日から展示会 福屋八丁堀本店



見る、触れる…暮らしの中に存在

「介護」という響きに「アート」の視点を取り入れてみませんか。そんなユニークな提案を試みる展示会「アートな介護」が7月11日から、広島市中区の福屋八丁堀本店で始まる。広島県内のデザイナーや職人たちが制作した、介護現場で使える多様なツールを紹介する。さて、アートな介護って何だろう。(采井敦子)

くり、展示会「アートな介護」を開くことを決めた。出品するのは「介護される人や介護する人がほっとしたり、気分転換になったりして、気持ちが良いくなるようなモノ」。今、県内のデザイナーや職人たちが中心に、福屋、購買、購買、味覚、触覚の五感で感じる「千数種類を準備している。例えば、夕暮れ時をモチーフにする認知症の人に触って楽しんでもらおうと、色彩プロデューサーの稲田恵子さん(66)は「21日市川」と建築家の山崎雄二郎さん(62)は

島市中区。3人は「介護の現場をよく知らない人たちが、アートな人のんきなこと」と言われるかもしれない」とも考える。「でもね、目の前の介護に追われていたら、アートなんて思いもよらない。当事者でなく、アートを職業とする私たちがから発想できることもある」と川原さん。

稲田さんは「美術館にある絵や彫刻だけがアートじゃない」とあらためて指摘する。「洋服も家のしつらえも、日々の暮らしはアートの連続。暮らしの中のアートが介護の現場では失われがち。そこに気付いてもらえたら」と願う。

アートにはどんな力があるのだろうか。山崎さんは「人を笑顔にする可能性がある。心に訴える何かがある」。

展示会は7月美術画廊で17日まで7日間開く。毎日、ギャラリートークも予定。川崎内科大付属病院長神林内科の片山福夫副部長やスウェーデンの認知症ケアの専門家インゲ・ターレンボルグさん、介護ロボットを提案する大和ハウス工業ロボット事業推進室の石渡淳さんらが、アートな介護のヒントを語る。



準備を進めるデザイナーたち。左から3人目が稲田さん、5人目が川原さん(広島市南区のデザインオフィスカワハラ)

詳しくはホームページ <http://www.art-as-care.com/> デザインオフィスカワハラ ☎082(284)8942